

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	寂しき一路
Author(s)	山本, 晋
Citation	龍南, 186: 42-45
Issue date	1923-07
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8648
Right	

風ポカど来れば移りぬ羽抜鳥
 友病める小窓いぶして毛虫焼く
 夕焼けの下の漁村や行々子

三味の音を聞く

徂く春を無心に婆が爪弾き

寂しき一路

山 本 晋

或る著者が次の様なことを云つてゐる。「私共の感ずる淋しさは、色々の原因から来るものがあつて、其の深淺にも差が多いが、大体之を二種類に分つことが出来る。一は對象によつて癒され得る淋しさであり、他は對象によつて癒されない淋しさである。」と。

女の愛、富、名譽、地位、子供、それらを求めて與へられぬ時に起る淋しさ、悩みは、前者であつて、之は意識的にせよ、無意識的にせよ、明かに對象によつて慰められ得る可能性を多分に有するものである。美しい妻を得、豊かな地位ある家庭を作つて、子供の二三人も生るれば大抵の人は、其の淋しさか

ら脱することが出来るものだ、私共が青春の今最も多く経験する何となく、人なつかしい物淋しさ涙ぐましい様な寂莫感は、多くは性的原因によるものである。中年に至つて、活動盛りの人々はともすれば物質慾や、名譽慾の満足せしめられないために悩み勝ちである、老年期に至つて感ずる淋しさは、それらと多少趣きを異にしてゐて、も少し内的に進んで来るだけ次に説く寂しさと似た點が可成りある。次に對象によつて癒されない淋しさ、これは總ての人々が誰でも例外なしに体験するわけにはいかぬ、然し、少しでも思索的経験を有する者には、瞬間的になりとも觸れることのある淋しさである。それは人間が自己の生活、否生存と云ふことを終局迄つきこんで考へたときに必ず觸れる淋しさであり悩みである。吾等は、自己の毎日の生活が、確乎たる精神的基礎の上に立脚してゐないことを意識した時に、どうしても樂天的な、ごまかしの生活を續けて行けなくなる、我々のコースは、この時外的より内的へと變つて来る、この悩みを体験することの深刻な程、益々深く内へ内へと踏込んで行く、而も道は益々複雑となり小さくなつて行く。

吾々は何のために生きてゆくのか？

過去數千年の間、世界の産み出した聖哲賢人の、血と涙との思索の跡は悉くこの寂しき一路に外ならない、而もこの問題が何人に取つても困難なものであり而もごまかし得ざるものであればこそ、人世は益々淋しく悩み多きものとなるのだ。

親鸞が弟子唯圓に言つた、

「私も淋しいのだよ、私は一生涯淋しいのだらうと思つてゐる……。」と。

親鸞は宇宙を觀た、而して自己を視た。眞に宇宙の宏大無邊にして、永遠なる相を觀、一瞬の生を其の上に兆する微小なる自己の姿を凝視した時、誰しも同じ淋しさに捕へられずに居られやうか、

一生胸に抱きしめて、死んで行くべき、人間の運命としての淋しさ、それは涙に濡れた人生を経験した者には必ずわかる。

この惱みは酒や女では癒されない。そんな外的の物によつて一時の糊塗を企てゝも、結局得る所のものは、一層深められた淋しさど、荒れ果てた野良犬の様な哀れな魂より外にはない。而もこの明白な自己偽瞞の邪路に陥るものゝ如何に多いことだらう、

私共は決してこの淋しさを逃避してはならない。素直に其の淋しさを體驗して涙に濡れた眼で人世をながめるのだ。この貴い體驗こそ、吾々の心の芽を延ばしゆく母であり光である、絶えざる人格の向上、それはこの淋しさを透して永遠を凝視せんとする努力の内からのみ生れ出づる。

眞に價値ある人世は、この深さに徹する生涯に生くる者にのみ許さるる。

或詩人は歌つた。

苦しめ！

哭け！

悲しめ！

淺薄なる樂觀より覺め、

空しき笑ひを悲しみにかへて

深刻なる人生の寂莫に泣け！

深き淋しさを静かに抱いて

凡ての人を見つむるとき

同じ現世に生くる有縁の悦びに涙ぐむ。

さうだ。この寂しき一路を辿りゆく者にのみ、眞の大愛は理解される。やむにやまれぬ自然の愛に立つて、人類永遠の向上のために、血の汗の滴る様な大活動をなし得る者は、必ず一度はこの寂しき一路に迷ひ迷つて、涙に濡れた者である。

眞の活動は、必ず深き思索の結果から生れる。

安價なる意氣と感激！

低級なる血と熱との生活、

おゝかく叫ぶ前に私共は、

是非一度對象によつて癒されないこの淋しさを體驗しなければならぬ。卑怯な回避的な態度を取らずに、素直に、人間に運命づけられたこの淋しさを味ふのだ。

我々が内へ内へと次第に深く切り込んで行つて、自己の魂の中の生命の水脈にまで掘りつけたとき、人間は初めて本物になる、哲學者はこの泉を名付けて、人生の意義と云ひ、宗教家は悟りと云つた。

この水脈は、自己一身の生命の根源なるのみならず、實に又人類共通の源泉である。

かくて自己救済の寂しき一路をつきつむれば、同時に萬人救済の鍵は發見される。

さうだ掘り下げる努力は如何に苦しくとも、私はうまず奮闘しやう、淋しく共、辛く共、それより外に私の生活は見出せないから。